

---

various swoud

しょたくん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

various sword

### 【コード】

N9007X

### 【作者名】

しょたくん

### 【あらすじ】

ある世界の物語、その世界には魔法が使えたり、モンスターが生息している。そんな世界のある魔法を使うのに長けた一族柊家の、その長男である彼の  
ひいらぎかいり  
柊乖離は落ちこぼれだった。  
そんな彼が成長して学園へ！  
主人公最強ものです。

## プロローグ（前書き）

初めまして、こんにちは？

作者文才ないですが、、、見てくれるのであればどうぞよろしくお  
願いします

## プロローグ

この世界には魔法が存在する。俺の一族は代々その魔法に長けた一族だ。

俺はその一族の長男……だった。

俺の名前は柊乖離（ひいらぎ かいり）

この時の俺は魔力があるのに魔法が使えない、落ちこぼれだった。でもそれでいいと思った、

いつも楽しく1つ上の姉や1つ下の弟と、そんな楽しい時間が続くと思っていた。

あの日までは…

俺は父様に呼ばれて修練場に来ていた。代々魔法の練習をしてきた由緒正しい修練場、  
だがそこでこんな事を言われた。

「乖離、今から私と戦え、もし私に1回でも攻撃を当てることが出来たらいいだろう、だがもし1回も攻撃出来なかったらわたしも考えなくてはならん。」

こんな事を言ってきた、

「何故ですっ！なんで僕が父様と！」

「いいからやるんだ、話はその後だ、」

「…分かりました、やります。」

俺は決意して父様に向かっていた。

結果は惨敗、一撃も加えられなかった、姉や弟でも1回くらい当てられるのに、

そんな考え事をしてしていると父様はこう言った。

「お前はもうこの家の人間ではない、さつさと何処へでも行け、と」  
勿論、反論はした、だが

「父様っ！嫌です、此処に居させてください！今までよりもちゃんと魔法が使えるようになります！だからっ」

「うるさい！さつさと何処へでも行け、」

この言葉の後に衝撃の言葉をぶつけられた、

「お前はもう私の息子ではない！さつさと何処へでも行け！だがせめて名だけはその名をくれてやる！感謝しろ」

この時、俺は10歳の誕生日を迎えていた、

## プロローグ（後書き）

はじまりました！

では1話でお会いできることを、

第1話 学園、夜の街（前書き）

1話目の投稿です。

よろしければ見てください

## 第1話 学園、夜の街

そして現在、俺はある人に助けてもらい15歳になった、そしてある人は言った。

「お前には色々な事を教えた、だが1つだけ教えてないものがある。それは人との触れ合いじゃ、そこで今からお前にはある学園に行つて貰う、

ちと時期が遅いがこの手紙をその学園の学園長に出してくれ、そうすれば多分入学できる。」

ある人はそう言った、俺は…

「分かりました、行つてきます。」

そう答えた、でも実際ちよつと楽しみだった、

「そうか、では生活に必要な資金は私が用意しておく、あとは自分で稼げ、お金の単位は

テラ（T）1円＝1Tじゃ、入学費は必要ないじゃろう、だから一応100万T渡しておく、

じゃ行つてこい、」

「はい、行つてきます。」

学園はルソス王国にある王立魔法学園と言つ名前らしい、俺は歩き出した、楽しみな学園生活の為に

そして今学園長室に至る、そこで話している。

学園長は体格がともいい、身長は180cmくらいだろうか、とても堅実そうな顔をしている。

「それで君はこの学園に入学したいと」

「はい、一応親というかそんな感じの人から招待状を預かっていま  
す。」

「ならその招待状とやらを見せてくれるかい？」

「はい、貴方に渡せと言われていたものですから」

俺はそう言い招待状を渡した、学園長はそれを見た途端硬直した。

「あの、どうかしたんですか？」

「君！これは本当に蔽の書いたものなのか？」

学園長は目を見開き聞いてくる、

俺はそれに対し確かにその人の名前は蔽だ、と告げる。

そう、俺を助けてくれた人の名前は蔽と言っ、

「蔽の息子という事が、血は繋がらなくとも期待大だな。」

学園長はそんな事を言ってくる、今でも魔法を放てないと言っのに、

「よし、君の入学を認める、ようこそ王立魔法学園へ柊乖離君君を  
歓迎する。」

「ありがとうございます。」

「そうと決まれば授業に必要な物は私が全て用意しよう。勿論住む  
所も決まっていなだらうから私が確保しよう、そこでちょっと待っ  
ててくれ。」

学園長はすごい上機嫌になり全ての用意をしてくれた。

そして確保してくれた家に行くと俺は驚愕した。

先程確保したとは思えない程、一人暮らしには勿体無い、

机の上には制服と俺が行くクラスの組の発表用紙、とにかく贅沢と  
言って良かった、

学園長に感謝しつつ自分の武器の手入れをする、  
俺の武器は1本の刀、魔法を使う者は皆杖とかが主流だ、まあもつ  
とも俺は魔法が使えないから意味は無いが…

気付けばもう夕方だった。俺は軽く夕食を済ませ暇なので夜の街に  
くりだした。

夜の街は思ったより静かだった、横から抜けてくる風心地いい。  
そんな風の音の中から悲鳴めいた声が聞こえた。

裏路地で4人の男に囲まれてる少女、ローブを被っていて顔は見え  
ない、

俺は面倒ながらも男達に声を掛けた。

「何してるんですか？」

最初は丁寧語で話しかける。事情があつたら失礼だ：最もそんなの  
無さそうだが、、

男達はゆっくりと此方を振り返る。皆、醜悪そうな顔をしている。

「なんだ？お前、お前もこの女みたいに奴隷になりたいのか？」

男達はゲラゲラ笑いながら少女の方を見ている。

見られている少女はガタガタと震えており怯えているように見える。  
それもそうだ、この世界では人を奴隷にする事を禁じている。

「おい、なんとか言えよ小僧、

でもお前中々、いやいい顔してるな？裏で売れば高く売れるかもな  
？」

また笑いだす。

これで男達の運命は決まったようだ。

「お前ら、さつきから丁寧に話してやってたらなんだ？それ。」

俺は口調を変える。

男達は一瞬焦った様だがすぐに怒り出した。

「てめえ、ボコしてから奴隷にしてやるよ。」

言った直後、男の一人が突っ込んで来る。

俺は闘気を纏い、後ろに跳躍する。

闘気は敵さんの教えてもらった、

”魔法が使えないからそ魔法を万が一に避けるために、”

数メートル後退して片足が地面に付く直後にまた足に力を込める、次の瞬間には俺は男の目の前に迫り、腹に拳がめり込んでいた。

「これで一人、さあ次は誰？」

俺は軽く笑い、闘気を最大の4分の3くらい纏う、

男達は闘気に圧されて動けない、

俺は刀を抜き放つ、かつて敵さんから貰った？練習用刀？

「覚悟しろよ？」

俺は男達に言葉を放ちその後高速で峰打ちをした。

3人ともピクリとも動かなくなる。

俺はそれを確認して刀を鞘に戻す、

そして襲われていた少女に振り返る、

「大丈夫か？怪我とか無い？」

一応聞いてみる、少女は

「はい、ありがとうございます。えっと助けて頂いて。」

少女は下を向いたまま、動かなくなる。

「そう、なら良かった、じゃあ俺は行くから、」

「待ってください！」

行こうとすると少女に止められる。

何かと振り返ると少女はローブを取って、

「私は王立魔法学園1 - Sクラスの立花裕香たちばな ゆうかです。

えっと、貴方は？」

「俺？俺は柊乖離、15歳、まあこんくらいかな？」

「え？15歳って私と同じ年ですか？」

「15歳なんだ？じゃあ同じ年じゃない？」

「え？でもそんなに強いのに何故学園に入らないんですか？」

この言葉に俺は苦笑した。何故って俺は欠陥品だから…

「まあそのうち会えるよ…多分、

ていつかなんで学園に入ってないって分かったの？」

俺は素直な意見を口にする。

彼女は笑いながら答える。

「だって貴方みたいなカッコいい人は見たことが無いって…」

後々声が小さくなってきたが気にしないでおこう。

「じゃあ、俺は行くよ。じゃあまた明日。」

「はいまた明日」

俺は挨拶をして帰る。向かうのは宿、明日寝坊しないように早く寝なければ、

俺は鬨気を纏い全速力で家に帰り、フロに入り、寝た。

明日の大切な楽しみに備えて…

## 第1話 学園、夜の街（後書き）

第1話目入りました！

いよいよ次回主人公の学園生活が始まります  
では2話でお会いできることを、、、、

## 第2話 初登校、再会（前書き）

こんにちはは2話目です。

もうちょい更新したいんですが時間が、、  
暇だったらよろしくお願いします。

## 第2話 初登校、再会

彼女は考える。あの少年は何だったんだろうかと、結局、あの後家に帰り考えたが分からなかった。

学園にいる1年生なら大体知ってる、でもあの少年は居なかった。珍しい容姿だった。黒髪黒目で顔は可愛い、カッコいいで言ったらカッコいい、

まああの顔が嫌いな人はそう居ないだろう。

心当たりはある。がそれは多分ない、学園で黒髪黒目の人物が2人居る。

現在2年生の柊家長女、柊夏目、

14歳なのに飛び級の成績で2年生の柊家長男、柊祐樹

この2人はとても有名だ。柊家と言うこともあるが、  
姉は絶世美人、弟はとても可愛い子供？

この2人は分かる、だがあの少年は彼らと雰囲気似ている。

でも柊家は子供が2人のはず、それは無い…と思う。

しかもあの少年はまた明日と言った。まるで明日会える。みたいな言い方で、

とにかく分からない事が多すぎた。だから寝ることにした。

明日になれば分かる。と無理矢理納得して、

朝、俺は眠い目を擦りながら制服へと着替える。

青を基調とした生地にも所々赤でラインが引いてある上、下はチェックのズボン、

襲われた用に防御結界が少し施してあるらしい。

「さて、初登校だ。」

俺は聞いてる人も居ないながら喋る。

だがその言葉は自分に言った言葉でもあったが…  
学園までは歩いて3分、結構近い、これも学園長の計らい、  
俺は早歩きで学園へと向かった。

学園に着いてすぐに学園の職員室で説明を受けた。

言い忘れたが俺は1・Sクラス、昨日の子も確かそうだったが、  
クラスはS〜Eまでである。それぞれの能力でクラスが分かれる。  
Sが最強、Eが最弱、まあ魔法が使えない俺が何故Sなんだろうかと疑問に思ったが、

まあいい、そこへ俺の担任に当たる先生が来た。

「始めまして、柊乖離君、私は貴方の担任となる大山葵おおやま あおいです。  
どうぞよろしく。」

20代くらいの女の先生が笑いながら自己紹介をしてきた。  
俺も自己紹介をして早速クラスに案内される。

クラスの前で此处で待っててと言われ中で先生が話している。

「はい、皆さんおはよう。早速ですが今日は編入生を紹介します。」

先生の言葉で皆がざわめきだす。

「先生！女ですか！？レディイですかあ！」

男の声が聞こえる…コイツ馬鹿だ。

「男の子には残念ですが男子です。」

それを聞いた男子達の悲嘆の声が聞こえる。（マイエンジェル！君

は…）とか言ってるぞ、

先生が付け足し始める。

「ですが女の子の皆さんは嬉しいかもですよ？」

「カッコいいんですか!？」

女子の一人が質問する。

先生は、

「私が奪っちゃいたい位です！」

先生が爆弾発言をする。今のは幻聴か…？

「まあ早速出てきてもらいましょう。乖離君入ってきていいよお。」

先生の声が聞こえたので扉を開ける。

視線の先には数十人の俺と同じ年の人達、

男子は口をあんぐりさせて此方を見ている。

女子は…顔を真っ赤にして此方を見てる者、顔を下にして不気味に笑って居るもの、

はたまた、(神様!有り難う!)と神に感謝してる物、それぞれ、ふと目が合った少女は昨夜会った少女で俺を見て放心している。

改めて見ると…うん、とても可愛かった。要するに美少女、

「始めまして柊乖離です。どうぞ皆さんよろしく」

俺は教室での最初の一言を発した。

女子は黄色い声で叫んでる者多数、男子は…うん、察して

「じゃあ親睦を深める為に質問したい人いますかあ？」

先生がこんな事を言い出す。

「はい、乖離君?単刀直入に聞くけど彼女は居ますか!？」

「いません。」

「はい、好きな人はいますか？」

「いません。」

「はい、自分は強いと思いますか？」

「思いません、寧ろ最弱ですかね・・・」

「はい、昨日会った時のあれはなんですか？」

「っ！やあこんにちはアレは刀術ですよ？俺魔法使えないですし・・・」

「闘気も纏ってましたよね？」

「...はい。」

昨日の女の子の尋問、他の生徒からは（知り合い？）（裕香あ抜け  
駆けだめえ）

（闘気つて嘘だろっ！！）（魔法使えないのかよ...）... e t c

「単刀直入に聞きます。貴方は柊家の人ですか？」

俺は一瞬体を強張らせた。だがすぐに冷静を装い、

「柊家と言つのはあの魔法で有名な一族ですよ？

私がその者だと...？あり得なくは無いですか？あの家は2人しか子供は居ないはず

確か16歳の長女と14歳の長男が居るだけの気がしましたが...？」

なんとか答えた、とどめに

「それに僕は魔法が使えない、

そんな人間が魔法最強の柊家に居るわけ無いじゃないですか？」

こう答えた。彼女は少し考え、そして、ありがたう言って席に着いた。

しばしの沈黙、その沈黙は先生によって破られた。

「あの～皆さん、乖離君の実力なめてません？」

先生はこんな事を言った。本日2度目の爆弾、

生徒は口々にだって魔法使えないんでしょ？などの質問、

「なら先生の提案で、乖離くんと模擬戦しましょうか。」

…ハイ来ました。本日3度目の爆弾、

その言葉に反応した男子、約1名、

「先生、僕にやらせてください。」

言って男は立ち上がった。金髪碧眼、容姿は美少年、

「その男、気に入らないのでぶちのめします。」

…性格最悪、

すると聞こえてくる皆の声、（まさか、アイツ男子学年主席だぞ？）

（乖離君大丈夫かな？）

おいおい、物騒だな！男子学年主席って1年男子最強だろっ！？

「おい！お前、調子に乗るなよ？いますぐ校庭に來い、

つぶしてやるよ。その気に入らない態度も、口調も全てなっ！」

俺は決めた。こいつ等にはもう普通の口調でいいな。と

「黙れ、学年主席か、いいねえ、潰してやるよ。」

この声を聞いた誰もが耳を疑っただろう、

もう丁寧じゃなくていいよな？心に質問して納得、

すると聞こえてくる昨日の少女、裕香の声、

「アンタ、初日で素が出たわね？」

「ああ、もういいや、これでいいや」

俺は彼女に笑いながら答える。

彼女の周りには女の子達、（あれって乖離君の本性？カッコいい！）  
などなど

「おい！俺を無視するな、さっさといくぞ。」

「ああ、すぐ行く」

俺は彼に着いていき、皆は俺についてきた。

現在場所は校庭、俺の目の前にムカツク金髪、周りにはクラスの人々、

「ルールは簡単だ、どちらかが戦闘不能、もしくは降参した場合、これでいいだろ？」

「俺はいい。とにかく早くはじめよう」

俺がそう言うと金髪は笑い、自己紹介してきた。

「僕の名前はルアーデーケミスト、君が負ける相手の名前だよ。」

俺は無視して、先生に合図を促す、

「では試合開始、」

先生の合図とともに試合が始まった。

「おい！金髪、お前の最高の魔法をぶつけてみるよ、」

「ふん、いいだろう。後で後悔するなよ？」

「上等、」

俺は彼を挑発して彼の实力を見ることにした。

「我の忠実なる炎の精霊よ、汝力を此処に示せ！

炎陣の鉄槌！（フレアドライブ！）」

彼の詠唱魔法が俺に飛んでくる。俺は静かに言葉を唱える。

結果的に彼の詠唱魔法は俺に当たった瞬間消えた。

「っ？何故！僕の魔法が消えた！」

そこには無傷の乖離の姿、

「どうした？学年主席ってのはこの程度か？聞いてあきれな？」

俺はさらに挑発、

「うるさいっ！みてる！」

灼熱なる業火よ龍の姿表し我の前に顕現せよっ！灼熱業龍！（ボル

「ケーノ！」

今度は龍の形をした炎の塊、だが所詮は炎の塊、

「デイスペル、」（四元素魔法拒絶）

俺はこう唱えた。それだけで龍の姿をした炎は消えうせる、

金髪はもう立ってるだけだった。

「主席はやはりこんなもんか？じゃあ消えろ、」

俺は刀を抜く。そして纏うための詠唱を始める。

「纏い、風刀。」

彼の刀に膨大な風の魔力が纏い始める。

皆驚いていた。学年主席の魔法が通じない、

そして彼の刀に驚いた。刀に彼は風を纏っている。

本来武器に火、風、土、水を纏うには膨大な魔力と膨大な精神力が必要、

使える者なんて聞いたことが無い、

だが彼は使っている、風を、

私はそんな彼をカッコいいと思った。

その時、彼女の初恋が始まった、詳しくは立花裕香の初恋が・・・

俺は魔法が使えない、だから蔵さんに武器に魔法を纏えと言われた。最初は意味が分からなかった。

1年でようやくつかんだ俺専用の魔法、

魔法を纏う武器、（刀）魔法刀、これは俺が勝手に呼んでる。

俺専用と言うのは、魔力が極端に多くて、魔法が使えない者のみか使える魔法、

だから今の所俺専用、蔵さんいわく、お前しか使えないそうだが、そして今それをつかった。

金髪に力の差を見せる為に

「じゃあな、風刀、波風」

俺の魔法を唱える。

俺は一瞬で彼に接近、それに気付いた彼は炎で出来た盾を張った。

「無意味だそんなもの」

そんな物は意味が無いのに、

俺の風を纏った刀は斜めに盾を切った。

刀が触れる直後に炎が消えていく、

そしてその一撃がもたらした風が、彼の元へ届く、

そして彼は吹っ飛んで壁に激突、

「だから無意味だと言ったのに」

彼は先生に連れられて保健室に、俺は生徒から尋問を受けた。

結局、デイスペルや魔法刀の事を全部聞かれてしまった。

デイスペルは魔法の四元素全てを纏い、魔法を拒絶する。

口では簡単だが無理だ、普通の人なら一元素が限界、強い人でも二元素、

俺は4元素使えるあと他の系統が4つあるが。四元素はばれた。残り

りは…

まあその後女子から食事に誘われて午後の授業を受けて終了。

俺の始めての学園生活はこんな感じにスタートした。

## 第2話 初登校、再会（後書き）

いよいよ始まりました学園、

ただちよつと主人公の力見せすぎかな…なんて考えたりして、  
では第3話でお会いできることを

### 第3話 グループ（前書き）

こんにちは、3話目です。

最近忙しい事があります。

少々投稿が遅れるかもしれませんがよろしくお願ひします。  
では、どうぞ

### 第3話 グループ

次の日、俺は学校でグループを決めることになった。

グループとはクラス対抗戦やギルドの依頼と一緒に受ける、いわゆるチームをクラスで作る事らしい。俺は編入したばかりだからまだグループが決まっていらない。

「じゃあ乖離君のグループ決めるわね？単刀直入に乖離君欲しい人」

「うわゝすごいですね？乖離君の人気、」

「でも乖離君はもう先生の物だからどこにもあげない。」

「うわゝすごいですね？乖離君の人气、」

「でも乖離君はもう先生の物だからどこにもあげない。」

「うわゝすごいですね？乖離君の人气、」

「でも乖離君はもう先生の物だからどこにもあげない。」

「もういいわよ、先生怒ったわ、はい乖離君欲しい代表、なんで欲しいか言ってるって」

「先生もうヤケクソになってるなあ」

「先生、乖離はこの僕、ルアーデのグループである」

「最強の勇者」に入れるのはいかがですか？」

「チームの詳細を詳しく教えてあげなさい。」

「いいでしょう、よく聞くんだよ？乖離、僕のチームは僕を入れて6人、男子3人女子3人のグループさ、どうだい？僕の配下にしてあげるよ？入りたいだろ？」

心の声コイツうぜえ

「さあ乖離答えを聞こうか？まあ勿論決まっているだろうがね？」

「では、いやです、  
即答する俺、

「そうだろ？だってこの僕がリーダーなんだから入りたいのは当然つてなにいいい！」

驚愕するルアーデ、

「ははは、君面白い冗談を言うんだね？理由を聞いてもいいかい？」

「いいですよ？まあ単刀直入にリーダーがうざいです。これくらいですかね？」

「僕の責任なのかいつ！？なあ君達、僕ほど完璧なものは居ないと  
思わないかい！」

周りを見渡してクラスの全員を見るルアーデ、

対するクラスの皆は白い目でルアーデを見ている。

「嘘だ、こんなにカッコよくて性格がいい僕が嫌われているなんて  
っ！」

コイツ、あほだ。

「はいはい、そこに居るアホはほっとして他に志願したいグループ  
居る？」

先生、悪魔だ。

「はい、先生、乖離君には私の率いるグループ、“祈り”に入って

もらいたいです。」

声を挙げたのは裕香だった。

「はい、裕香さん、貴方が男子に興味を持つなんて珍しいわね？それで理由は？」

先生は理由を聞くこととする、それに裕香は顔を少し赤くしながらも答える。

「私、実は乖離くんに此処以外で会った事があるので一番話しやすいかと、、、」

「それだけ？本当にそれだけ？」

先生が言及している。裕香は顔を真っ赤にして、それだけです、の連呼

「で、乖離君的にはどうなの？裕香さんのグループに入ってもいいならいいけど、」

「別にかまいません、寧ろ話す相手が居てくれた方が安心しますし、」

「そう、じゃあ裕香さんのグループはただいまより乖離君を加えて女子3人、男子1人のグループとなります。少々他のグループよりは少ないですがまあ大丈夫ですかね？」

「じゃあ乖離君は裕香さんのグループで自己紹介でもしてて、と言って先生は出て行った。」

「チョットマテ、先生はグループ男子一人と言ってたような、、、」

「何してるの？早く行くわよ、」

裕香が俺を急かしてくる。

「裕香さん？もしかして男子って俺一人？」

「そうよ、良かったわね？他の2人は美少女よ？あと名前で呼んで、」

私も名前で呼ぶから」

「分かった。お前は違うのか？」

「違うって？」

「いやお前だつて十分可愛いだろ？」

「っ！！」

途端に顔を赤くする裕香、俺、なんか悪いこと言った？

「もうっ、バカッ！さっさと行くわよ。」

「待てよ、裕香」

着いて行くとテーブルに2人の女子が座っていた。

「とりあえず乖離、座って。」

裕香に言われ座る。

「まずは自己紹介ね？私は裕香、もう知ってるでしょ？」

「ああ、お前のことは知ってる。」

「そうなら貴方自己紹介しなさいよ。」

「おっと、俺は柊乖離だ。えっと3人ともよろしくになるのか？」

「よろしく、乖離っち、私、峰倉愛愛みねくらあいでいいよ。」

「……直江明なおえあかり……よろしく、私も別になんて呼んで貰ってもかまわない」

「ああ、よろしく、えっと愛と明、俺もなんて呼んでも構わない。」

2人は対照的だった。愛のほうは元気な可愛い女の子、

一方、明には冷静で綺麗な女の子、と言った所か、

「はい、自己紹介終わったわね？一応、得意魔法とかも話しときましようか。」

私から、私は水魔法の回復系統よ、

裕香が言う。

「私はね！雷の魔法が得意なんだよ」

と愛、

「…得意魔法、闇、」

と明、

「へえ明は闇が使えるのか？すごいなあ。」

俺はそういつて笑って見せる。

「…そんな事…無い、貴方の方がずっと…すごい」

明の顔が少し赤くなつたが、気のせいかな？

「ねえ乖離っちゅ？質問なんだけど、乖離っちゅって自分の顔の事自覚してる？」

「突然なんだ？愛、それはどういう意味だ？」

「もういいよ、まあとにかく明籠絡だね？裕香はもうされちゃってるのかな？」

愛がそんな事を言い出す。

「バカッ、私は籠絡などされてない！」

なにやら言っている裕香、

「いいじゃん、私ももう攻略されてるから、

早くしないととっちやうぞ、乖・離・君。」

それを聞いた途端裕香は黙ってなにやら考えている。

少し考えて、

「負けないもん。」

「負けないよっ！」

「…勝っ」

と上から裕香、愛、明の言葉、

「あの？さつきからなにを話しているんだ？」

「…関係ない！」「」

ハモった。

「とにかく、今日は解散ね？明日はなんか模擬戦みたいのやるらしいからそこで色々決めましょう。じゃあ皆、解散」

そうやってグループ結成1日目終了した。

とにかく俺はグループ、祈りのメンバーになった。

### 第3話 グループ（後書き）

グループ決めました。この後はチームクラス代表を決めると  
思います。

では4話でお会い出来ることを、、、、

#### 第4話 模擬戦（前書き）

こんにちはっ、時間があつたんでもう1話投稿しました。

僕、ストックとか作らないので次は遅くなるかもしれせん。

なるべく早く投稿しようと思いますので今後共よろしく願います。

あと、感想などお待ちしております！

## 第4話 模擬戦

そして次の日、今日はクラス代表のグループを決める模擬戦があるらしい。

「てな訳で1位取っちゃうぞーオー」

「…オー？」

「なんだ？このノリ、」

「同感」

こんな感じでグループやってます、ハイ。

「3回勝てばクラス代表だよ」

「そうなのか？」

「ええ、ルールの的にそうなってるわ。」

「…負けるのは悔しいから、や」

だそうです。早速1回戦です。

1回戦の相手は同じクラス、当たり前か、グループ“疾走の追及者”という名前のグループらしい。

「これより！1-Sクラスによるクラス代表決定模擬戦1回戦を開始します。」

先生の合図によりどんどん指定の場所に着いていく。

俺たちは校庭、相手は6人だ。男子4人の女子2人のチーム、

「両チーム前へ、」

審判が合図をする。

「それでは戦闘はじめっ！」

「私の実力みててね？」

と言って愛はその場から消えた。

敵の方を見ると男が一人倒れていた。

「これが私の実力だよん！」

愛が目の前に現れる。

「雷で足を活性化したか。うまいな？」

「でしょでしょ？」

「無視するなああああ！」

男が一人斬りかかってくる、武器は斧だ。杖を使わないのは珍しい、と、男の斧が黒い霧によって動きを止めた。

「…私も強い？よ、」

「…闇槍 沙羅夜」

明の手には黒い槍、それを突いて男の斧を弾きその隙に槍を横に薙ぎ男を倒した。

「…ブイ！」

「お前ら強くないか？」

「そんな事はないわ、ていうか貴方に言われると嫌味にしか聞こえないわよ？」

後ろには残りの4人を殲滅していた裕香、

「裕香、お前そんなに強いのならなんであの時襲われてたんだ？」

「足が竦んじやったのよ！」

涙目になる裕香、

「あゝあ乖離っち、裕香泣かせたくもうこれは次の戦闘は乖離っち一人でやらなきゃね？」

「…同感」

「そうね。それなら許してあげるわよ？」

「何故そうなる…！？」

3人は笑い、俺は逃げられなかった。

「お前ら…グルか。」

俺はこの人達を怒らせてはダメだと悟った。

2回戦目がはじまった。

約束どおり俺は一人で戦うらしい。

「両チーム、前へ、」

相手は4人、全員女子、正直やりづらい。

「戦闘開始!」

戦闘が開始してすぐに一人の女子が目の前に居た。

「はっ!」

女は剣を振る。早い

その後も俺はあしらい続けた、女の方は疲れてきたみたいだ。

「ごめん!」

俺は闘気を纏い女の背後に回り刀の鍔で殴り気絶させた。

そして次の瞬間、目の前に膨大な光の塊がある事に気付いた。

「っ!」

咄嗟に右に飛んで回避した。

「あら?私の光魔法効かなかったのかしら?」

女は笑いながら俺に聞いてくる。

「いや、あともうちよつとやばかったら危なかった。」

「そう、でも貴方本当にカッコいいのね?近くで見るとやばいわ。

だから私が貴方を倒して介抱してあげる。」

女は笑いまた光魔法を放ってきた。

「纏い、水刀」

「水刀、水舞欄」

俺は刀に水魔法を纏い光魔法とぶつかり相殺した。

「何故ツ!なんで水なんか光と相殺に!」

女は一瞬驚愕したがすぐに笑い、

「すいません、もう手加減できませんね?

天を繋ぐは私の閃光、貫け、光の虚剣」

女の前に眩い光を放つ虚剣が現れる。

「さあ踊りましょう?」

女は俺にその剣を叩きつけてきた。

「くっ！」

俺はかるうじて避けて策を練る。

「水刀、水破天虐！」

そして今までよりも膨大な水の魔力を纏い、縦に薙いだ。

一振り、たったそれだけで形勢が逆転する。

なんせこの水破天虐は一振りで何発もの水の刀が四散する。

水は圧縮して放つと鉄でも切れる。その鋭い水の刃が光の虚剣へと当たり、弾けた。

「っ!？」

彼女もこれは驚いているようだ。

「どどめで、水刀、小波」

先程とは打って変わって微量の水の魔力を纏い、彼女の体に軽く当たった。

普通の服ならこれでも致命傷、あるいは死んでる、だがこの学園の制服は結構強い、

彼女の体には傷一つ付いてないだろう。まあ衝撃は来ると思うが、彼女が倒れた事で模擬戦は終了、よって俺達は決勝へと進んだ。

「乖離っち〜正直に答えてね？人間？or化け物？…どっち？」

「…貴方、何者？」

「私はもう慣れちゃったけどね、でも光を水でつて…ねえ？」

「お前ら勝ったのに酷いな？俺精一杯やったんだぞ！」

神様！この人達は悪魔ですか？

「まあそれは置いて次の試合はルアーデのチームよ？」

「ああ、あのカスカ、」

「乖離っち〜カスつて一応学年主席なんだよ？」

「アイツ弱くないか？」

「まあねえ、でも乖離が止めたあの炎の龍、私じゃ受けられないんだよねえ」

裕香が悔しそうに話す。

「あんなの軽い方だろ？」

「…貴方は問題外、」

またさりげなく否定されましたねえ、はい！

「まあそんなのも柊家、姉弟に比べたら貴方が言うように軽くあしらうだろっかね？」

なにかを言及するような裕香、俺は少し顔が引きつったがすぐに戻し、

「そんなに強いのか？柊家は、」

「ええ、強いわよ？貴方みたいだね？」

「何が言いたいんだ？」

「私に教えてよ、貴方柊家の者なんですよ？」

俺は答えようか迷ったがしばし考えてこう答えた。

「今はもう柊家の者じゃない。俺は柊乖離、関係の無い事、ただそれだけだ。」

「…そう、ごめんなさい。でも貴方、そのうちばれるわよ？」

「まあ、なばれたらばれたで仕方がないことだ。普通に暮らすさ。」

「そうよね、じゃあ次の試合行きましょう。遅れるといけないわ。」

「ああ」

学園に入って数日、一人に俺の存在がばれた。

「こりゃ案外早く見つかるかな？」

俺は空を見ながら言った。その空は青く蒼く澄み切っていた。

「ハツハツハ乖離、今回は貴様を倒して見せるぞ！相手をしろ！」  
「いやだ、」

「よしそれでこそ男！じゃあ俺と…なにいいいい！！！」  
「お前なんかキャラ変わってるぞ？」

「知らん！作者に聞け！そんなことより勝負しろ！」

「やだ、だつてお前弱いし、ウザイし、生理的に無理だし、  
「酷くないか？乖離？」

「俺に勝てたら認めるよ。普通の接し方をね。」

「いいだろう！今日こそはお前を倒す！」

「と言うことで裕香と愛と明は他とお願い。」

「まあ良いけど…」

「アハハ、乖離っち、負けたら奴隷ね？」

「…賛成」

「酷くないかつ！」

「じゃそれで、」

裕香、明、愛、狂いました！

「じゃあ早速、やろうか。」

「そだね」

「…瞬殺」

この子達本当に大丈夫なんでしょうか？

「雷装、瞬脚」

愛の魔法、脚に雷を纏い、人の能力を超える脚力を見せる技  
愛の武器は短剣、脚が早いと果物ナイフでさえ凶器に等しい、

対する敵はなんとか愛の乱舞を止めている。結構強いのだろう。

「ハハッ、やつぱ君は止めてくるね？」

「当たり前だ、これくらい」

「そう？じゃあ久々に本気でやるね？」

「雷装、瞬腕」

愛の攻撃回数は1秒3発、それを永遠と防ぎきるのは無理がある。腕に雷を纏って1分と経たないうちに勝負は付いていた。

「闇影、幻夜の誘い」

明の攻撃が相手に当たった瞬間、相手は錯乱して倒れた。多分闇系統の幻覚魔法、まあその幻覚は血がぐっちょぐっちょ出て、自分の顔にかかり、

目の前に死んだ人達が…みたいな奴だろう。喰らいたくは無い！

「水帝、睡蓮」

裕香の魔法はちよつと激しい。なにが激しいかと言うと技が大きい、今の技だつて校庭地形変えちゃつたし…

「あれ？もう終わり？あつけないな？」

裕香さんっ！貴方がこれやつたんですよ！？

「ハツハツハツ流石、だね？」

来ました。ルアーデ、

「さあ乖離！俺と勝負だ！」

「うん、早く終わりにしたい。」

俺は目を閉じて闘気を纏い、突撃した。

「流石っ、早いね？炎ノ盾！」

ルアーデは炎で出来た壁を作る。素手なら重症だ。素手なら、

「ディスプレイ、」

俺は突き出す右手にディスプレイを纏い、殴る。

それだけの行為で炎の盾は消える。

「くっ！灼熱業龍！」

「土刀、纏い」

「土刀、堅閃」

刀が土に覆われていく、ただの土ではないが、平たくなつた刀は炎の龍を全て防ぎきる。

「一昨日よりは強かつたよ？じゃあ終わり」

「土刀、地壕降下」

刀を地面に叩きつける。そこから地面が割れ、そこにルアーデは落ちる。

本当は体にこの一撃を当てるのだが…流石に死ぬだろう。

「ルアーデ、残念でした。」

俺は人事のように言つて3人の元に帰る。

「ただいま戻りました。」

「お帰り！ツチ何で負けないんだよ！」

「…おめでとうそして残念。」

「お帰りなさい。」

まともに返事をくれたのは裕香さんだけでした！

「はい、今回のクラス対抗戦はチーム祈りで決定ね？」

「じゃあ4人共、先輩達にも負けないようにがんばってね？」

「え？学年対抗戦じゃないんですか？」

俺は問う、

「あれ？いつてませんでしたっ？学校全体ですよ？」

俺の正体ばれるかも、おh

ちよつと心配になりながらも無事模擬戦終了、次は対抗戦、

「どうなるんだろうな？」

俺の独り言は周りの喧騒によって掻き消された。

#### 第4話 模擬戦（後書き）

模擬戦です。次は対抗戦にしようかと思えます。

明日は投稿できるか分かりませんががんばってみます。

では5話でお会い出来ることを、、、

## 第5話 対抗戦開始(前書き)

対抗戦です。本当にちょっと投稿できません。

## 第5話 対抗戦開始

今日の天気は快晴すがすがしい朝、そしてそれを見る俺の心は嵐、  
「今日是对抗戦かあ、ばれないようにしないとなあ。」

虚空に向かって今日の目標を言う。

「さて、登校時間だ。」

俺は玄関を出て歩き出した。足取りは重い。

そして玄関の近くに人が立っていた。よく知ってる人物だった。

「裕香、どうしたんだ？こんな所で、」

「つえ？い、いやたまたま通りかかっただけ…よ？」

「何故疑問系なんだ？」

「まあいいのよ。ちょうど良かった。一緒に学校行きましょう。」

「ああ、いいぞ」

俺達は2人並んで歩き出した。

少し歩くともう学園だが彼女は聞いてきた。

「ねえ？今日はどうするの？」

「どうって？」

「今日対抗戦にはお姉さんと弟君出るんでしょ？」

「ああ、そうらしいな？」

「調べただけどうも貴方のお姉さんと弟君、同じチームよ？」

「っ…！？それは本当か？」

俺は自分の体が強張るのを感じた。

なんせあの最強が2人同時で来るのだ。洒落じゃない。

「間違いなく真実、特にお姉さんの方はやばいわよ？」

「…知ってる。まあばれても戻りはしないさ、絶対に…！」

「…ごめんなさい、暗い話になっちゃったね？」

それでお願いなんだけど…」

「なんだ？言ってみ？」

「うん…もし今日優勝したら、私とデ、デー…トして、」

「？よく聞こえないもうちよいはつきり頼む。」

「もういいわよ！馬鹿！」

「いつて、待てよおい！どうしたんだ？」

裕香は俺の大事な部分を蹴って行ってしまった。

「なんだつたんだ？」

俺はさっきの事を思い出しながら歩いていると誰かにぶつかってしまった。

見ると女の子のようだ。

「ごめんなさい、ちよつと考え事を、」

俺は謝り、女性に手を貸す。

「いえ、いいんですよ。」

女性が顔を上げる。

俺はその顔を見た途端硬直した、その女性は柊夏目：俺の元姉ちゃんだつた。

女性も感ずいたようで、

「乖離…なの？ねえ！そうなの？」

「人違いですっ！」

俺は気付くと走り出していた。

後ろから呼び止められる声が聞こえたが気にしない事にした。

教室へ入った後も俺は落ち着いていられなかった。

そわそわしているとチームの3人が来て、

「乖離つち、どしたの？顔色悪いよ？」

愛が聞いてくる。他の2人も心配してるようだ。

「姉ちゃんと会った。」

「姉ちゃん？」

「愛と明は知らないのね？乖離、この子達ならいいでしょ？」  
俺は裕香の質問に無言で頷く。

「乖離、実は柊家の人間なの、」

「っ！？ねえそれって…嘘だよな？」

「…本当に？」

2人も動揺している。

「ああ、本当だ。今は違うが血は繋がっている。」

「そうなんだ。」

「…なんとなく分かる」

2人の反応はこれだった。

「でもなんで？乖離っち強いじゃん！なんで今は柊家じゃないの！」

「俺は魔法が放てない、使えない、魔力はあるのに…だ」

「…だから捨てられたの？」

「ああ、そうだ、それだけで10歳の頃捨てられた。

まあ今は未練なんて無いけどな？」

3人は暗く黙り込んでしまった。

「おいおい、俺の事だ、気にするな。ほら対抗戦行くぞ？」

俺は3人を連れて対抗戦へと向かっていった。

「お姉ちゃん！本当なの！？兄ちゃん居たの！？」

「ええ、あれは多分乖離だったはずよ？」

「良かったあゝ居るんだ！じゃあ戻ってくるよね？」

弟、祐樹は興奮した様子で聞いてくる。

「…分からない。」

「え？」

私のは分からなかった。いつも私を見ると近寄ってきた乖離が今日は顔を見た途端に逃げていった。

「どうして？」

私はもう一度会って家出した理由を聞こうと思った。  
なんで家出なんてしたのっ！乖離！

私は心で怒っていた。

10歳の誕生日に乖離が家を出てったと父から聞かされた時は本気で怒っていた。

家出ではなくその父から追い出された乖離の事は知らずに…

対抗戦会場では真ん中をぐるっと囲む観客席、

控え室ではそれぞれのクラス代表の人達、

「はじまりました！クラス対抗戦！チーム戦、

このゲームは各クラスの代表チームが1対1で争うゲームです。

詳しくは説明書をどうぞっ！」

説明書あるんかい！

チーム対抗戦説明~~~~

まずチームの代表者を決める。そして1対1で対戦する。

図で表すと…

裕香	V S	敵キャラ A	x
明	V S	敵キャラ B	x
愛	V S	敵キャラ C	x
代表者 乖離	V S	敵代表者 x	

は勝ち、xは負けとなると4対0で左が勝ちとなる。

だがどれだけ代表者以外が勝っても代表者が負ければその時点で代表者が負けたチームの負けとなる。

まあ代表者が全てを決めるゲームと言っている、

なら前の3人必要なくね？とお考えの方！見逃してください！

戦闘する人数は少ない方に多い方が合わせるようになっている。

例、5対4＝4対4、こんな感じだ。だからずっと試合に出る者も

いれば出ない者もいると言うことらしい、お分かりいただけましたでしょうか？

作者説明ヘタですので分からなかった人は御許しを、、、

「で、代表者は誰にするんだ？」

「え？乖離つちでしょ？」

「…当たり前」

「私もそれでいいと思うわ」

この人達は…！

「本当にいいのか？俺が負けたら負けだぞ？」

「…いいよ」「…」

わーそろつたーすごーいつて違う！

「もういいよ！俺で、負けても文句無しだぞ？」

「大丈夫でしょ？だって乖離つちのマジまだ見たことないし」

「そだよね？乖離」

「…分かってる」

「ばればれかよ、ハアまあいいや」

こうして代表者は俺になった。いよいよ1回戦だが

「さあ注目の1回戦です！対戦チームは1ーSクラス対2ーAクラスだ！

最初から1ーSは2年生と当たってしまったが大丈夫か！？

しかも1ーSの代表者は最近編入してきた子だ。この試合どうなるんでしょうか？」

そして始まった対抗戦、順番は裕香、愛、明、俺と言う順番だ。

なお乖離以外の3人は戦闘実況はたまにありますけどほとんどありません。

ごめんなさい！と言うことで結果だけ、、、

裕香 圧勝

愛 圧勝

明 相手に惨い戦い方をして圧勝

「なんとお！1 - Sクラス、2年生がまるで歯が立たない！すごいです！

ですがまだ試合は終わっておりません！

それでは代表戦！2 - A代表者、1 - S代表者前へ！」

目の前の男は笑って此方を見てきた。

「危なかったよ。俺以外じゃ彼女達に歯が立たない、

でも俺だけは強いよ？しかも相手はこの頃編入してきた奴だって言うじゃないか！

しかもなんだい？その髪の色？柊家でも気取ってるのかい？髪の色変えただけじゃ強くはなれないよ？」

「長々しいセリフをどうもありがとうございます。ですがこれ地毛なんですよ？先輩、

あと、柊家じゃない奴が柊家語ってるんじゃないかねえよ、消えろ」

俺は仕返しにこう言ってやった。

男は顔を真っ赤にして怒鳴り始めた。

「貴様あ、先輩の礼儀がなっていないな？覚悟しろよ？」

男は無詠唱で魔法を放ってきた。

だが所詮は下級魔法、闘気を纏い素早く後退、

「もう終わりかあ？あっけねえなあオイ！」

男の声が聞こえてくる。

魔法が当たった所の煙が晴れて男の顔が引きつる。

「なんで当たってねえんだよ。」

「あんな遅い魔法効きますか？」

「てめえ」

「いいこと教えてやる。俺は系統雷の使い手だ。このナイフ1本でお前の首搔つ切ることが出来る。」

男は脅しのように声を挙げ、ナイフを取り出す。

「試して見ればいいじゃないですか先輩？たかがナイフじゃ俺は殺せませんよ？」

俺は更に挑発して動きを見る。

「死ね！」

男は一言言つと視線から消えた。

そして左から迫るナイフを素手で受け止め、

「ほら先輩、遅いですよ？」

両手でへし折つた。

そして男の腹に蹴りを入れる。

「があ」

男がうめき声を上げる。

「じゃあ先輩の真似を…いいこと教えてやる。貴方は自分が雷系統を使う、と言つたが、

そのくらい俺だつて使える」

「雷刀、纏い、」

「雷刀、激雷」

刀に雷が帯びる。そして刀の先から雷のみの刀が伸びる。

その先で男の体を切つた、いや、当てた。

結果、男は感電して気絶、

その後しばし無言の間が訪れた。

少し経ち、所々から歓声が聞こえてきた。

「すごいです！1-Sの代表者は2-Aの代表者を軽く倒した！

これはダースホークでしょうか！今後共期待したいです！」

俺は皆の下に戻ると、

「乖離つちく雷も使えたの？」

「…規格外」

「もう驚かなくなってきたかも」

「酷いなあ勝ったのに。」

「またもや非難？された。この試合を見てた姉弟がいたのだが・・・」

「姉ちゃん、あれ兄ちゃんだよな？」

「まず間違いないわ。あんなに強くなってる」

「じゃあその内当たるかな？」

「どうでしょうね？」

姉は笑う。弟はそれを不思議そうに見てる。

「はやく来なさい。乖離」

姉の発した言葉はこの場にいる弟しか聞こえていなかった。

## 第5話 対抗戦開始（後書き）

結構疲れました。

評価してくださる方々ありがとうございます。

これからもがんばります！

では6話でお会い出来ることを、、、、

## 第6話 対抗戦、姉戦（前書き）

こんにちは！大事な事が終わりました。

これからはばんばん書いていきたいと思えます！

第6話、どうぞ！

## 第6話 対抗戦、姉戦

その後俺達は何回か勝ち進み、遂に2 - Sクラスと戦う事になった。2 - Sと言えば柊家の二人が居るクラスで有名ならしい。なんでも柊家に勝てるのは生徒会長くらいだとか…その生徒会長もヤバイらしいが…

「さあなんと1 - SクラスVS2 - Sクラスの対決です！

1 - Sには代表を入れて4人の強者達！そして2 - Sにはあの有名な柊姉弟が居ます！

おや？1 - Sクラスの代表者もよく見れば柊、ですね？これは何かあるんでしょうか？

それでは、準決勝、開始です！」

司会者の合図で試合が開始される。

しかしあの司会者…？るか？

「ごめんなさい、ちよつといい？」

いきなり女子に話しかけられた。

「私達チーム2人なの、だから代表とあと1人でチーム組んでね？」  
紛れも無い…姉だ。

「だつてさ、」

「…2人なのに他のチームより強い、」

「誰が行くんだ？」

「私が行く！」

言つたのは裕香だった。

「まあいいんじゃないの？」

「…賛成」

案外早く決まった、試合は俺と裕香で出るらしい。

「そちらのチームは決まった？」

夏目が聞いてくる。

「はい、決まりました。」

「楽しみね？乖離、」

「：ナンノコトヤラサツパリデス。」

「まあいいわ。久しぶりに本気だせそうだし。」

夏目が笑っている。正直怖い、美人なのだか、

「さあ、最初の試合の方は前へ、」

「お姉さん、よろしくお願いします。」

祐樹が裕香にお辞儀をしていた。

「こちらこそ」

裕香は表情を変えずに同じ事をした。

「両者、試合開始！」

戦闘が始まった。

「お姉さん、ごめんなさい。僕、そこに居るお兄さんに聞きたいことがあるの、

だから早く倒すね？」

「どうぞ、」

「風翔、天馬」

祐樹が短い詠唱を終えると風が集まりあつと言つ間に翼が生えた馬になった。

「水帝、睡蓮」

裕香も膨大な水の渦が出来て行く。

その2つが当たり両方の魔法が散った。

「すごいや！お姉さん！今の本気だったのに！」

「ありがとね？」

「うん！じゃあ次ね？」

「え？」

裕香が言い終える前に詠唱を始める祐樹、

「闇風、闇風馬」

今度の魔法はちよつと違う。

あの風は多分、闇と風の魔法を混ぜた魔法、祐樹に出来るというこ  
とは、

「姉ちゃんにも出来るのか…」

俺は深くため息をついて試合を見守っていた。

「闇と風つてなによ！」

裕香はド突きながら後ろへ跳躍する。

「水帝、蓮華雹花」

裕香の魔法で一つ一つがとても大きい花が数十個と咲き誇る。

そしてその花は祐樹の魔法に触れた瞬間、何本もの槍となって貫い  
た。

別の花が当たる。今度は刀、次は針、

そして最後に大きな剣となり祐樹の魔法を切り裂いた。

「ハアハア、今のはきついなあ」

裕香が疲れた顔で祐樹を見る。

「お姉さん、本当にすごいや！」

「でもこれで終わりだよ？」

「闇風、八方烈風」

裕香の周りに黒い風が8つ出来る。

裕香に8つの風が迫って来て、全てが当たる直前に止まった。

「僕の勝ち！」

祐樹は嬉しそうに笑う。

裕香もつられて笑い試合は祐樹の勝ちで終わった。

「いよいよね？ 乖離？」

「誰ですか？ ソレ？」

俺と姉ちゃんは言い合っている。

「いいわよ、もう、乖離でも乖離じゃなくても、」

でも、と彼女は付け足す。

「乖離と仮定してお仕置きしなくちゃね」

「……………」

「さあお仕置き、もとい代表戦の開始よ？」

「…はい」

「それでは、試合開始です！」

司会の声、それと同時に夏目が手を横に振る。

手を振った瞬間、俺の立っている場所が凍った。

「っ！？」

「さあ乖離、私の氷は闇と水の氷だから簡単には壊せないよ？」

「くっ！闘気！」

俺は闘気を纏い素早く横に逸れた。

立っていた場所が氷で埋まる。

「まだまだよね？乖離、凍！」

また手を振る。無詠唱もいとこだ。

俺はまた飛び退き刀を抜いて斬りかかった。

「速いけど、甘いわよ？」

目の前に裕香の顔がある。そこには1mm程度の薄い氷、ただそれだけで刀を止められていた。

「くっ！火刀、纏い」

「火刀、薄火」

ぶつかっただままの壁に叩き込む、氷で出来た壁が溶ける。

「うそっ！」

夏目はすぐに下がりました氷を脚に付けようとした。

それを俺は

「火刀、薄火」

刀を下に突き刺す。

氷があつと言う間に蒸発する。

「！？乖離、酷いなあ、じゃあ本気で」

「闇氷、天氷夜鱒」

俺の周りに分厚い氷が全方向から迫る。

「火刀、業火絢爛」

目の前の氷に一撃を叩き込む。

氷は斜めに溶けたがまだ1本、

「もう1発！」

俺は今度、逆から斬りこむ、×字になった氷にとどめの横薙ぎ、

氷は溶けて目の前が見える。目の前には驚いている夏目、

「とどめ！」

俺は業火絢爛を纏い、爆発的に跳躍して夏目の目の前に迫る。

「っ！闇氷、刺殺壁」

夏目の前に前には表面に棘がびっしり付いている壁、

「くそっ！せああ」

俺はその壁に割り込み刀を振る。身体中に棘の傷が付く。

そしてそんなのも気にせず俺は夏目の首に刀を添えていた。

「俺の勝ちですね？」

「…負けちゃった。お仕置きできなかつた…」

「残念ですね？」

「…貴方、乖離なんですよ？ねえ！」

「…じゃあ俺は行きますね。またね姉ちゃん。」

俺は小さい声で夏目に言う。

「うん、またね？乖離」

夏目は泣きそうになりながらも笑って言った。

とうとう、ばれてしまった。でもいいと思った。

まあこれで柊家に戻ると言えば否だが…

こうして姉戦は終わった。次は決勝戦、相手は生徒会長、

「疲れたのになあ、…もうヤダ、」

## 第6話 対抗戦、姉戦（後書き）

次で対抗戦終わりにしようかと思えます。

その次の登場人物の紹介書きたいと思えます。

では第7話でお会い出来ることを、、、、

第6・5話 生徒会長、（前書き）

こんにちは、

この話はまあ間話とと思ってください。

短いですが、、、

## 第6・5話 生徒会長、

「はぁ今回も退屈ね、」

私は一人で試合を見ていた。

一応チームと言うことで通っている。

たった一人のチーム、私、高梨梨花<sup>たかなしりか</sup>だけのチーム、

何故一人なのか、私にも分からない、ただ二人いても、三人いても、私一人でも、

いつも結果が同じだった。それだけのことだ。

「夏目ちゃんとか祐樹君は結構楽しいけど他はなあ、」

今見てる試合はその祐樹君が出てる試合だから見ている、もうすぐ試合が始まる。

「へえ、祐樹君とやりあってる子結構いいわねえ」

でもまだ弱い、もっと強い人はいないのか。

「祐樹君が勝ったわね？」

見ると8つの風が1年生の女の子に当たる直前で止まっている。

「立花裕香ちゃん、1-Sクラス、覚えとこ」

次は夏目の試合、これは結構楽しみだった。相手は誰でもいい、

ただ夏目の試合を観たかった。

夏目の相手は男の子、代表らしいけど弱そうだ、武器も刀1本のみ、

「これは夏目、圧勝かな？」

「夏目？何を話しているの？」

夏目はかすかに口を動かしているように見えた。

男の子の顔はよく見えないが知り合いのようだ。

そして試合が開始された。

「え？」

私は驚いた。

夏目にじゃない、夏目と戦っている男の子、

「闘気を纏えるのかあ、中々やるのかな？」

私は少しこの試合が楽しみになった。

少し経つと彼が夏目の前で刀を振っていた。

夏目も本気を出したようで魔法を詠唱し始めた。

彼の刀がその壁で止まっている。

「なんで彼、魔法使わないのかしら？」

私は疑問に思った。

彼が何かをしゃべる。その瞬間、彼の刀に膨大な火の魔力が集うのを観た。

「っ！？」

私は驚いていた。彼女の薄い壁がいと容易く破られたのだ。

私は急いで夏目を見た。夏目は詠唱して魔法を放ったところだ。

あの魔法は確か、天氷夜鱒、と言う魔法だ。全方向から厚い氷が迫り潰される。

私も喰らった事があった。あれは傷を負いそうになった。

「彼も終わりかな？」

私は中ば諦め状態で観ていた。だが

分厚い氷に斜めの線が入った。

「え？」

疑問を口にする。そして次の線、次の線、そして

彼女の魔法が突破された。

そして彼が地面に脚をつけた途端彼女の前に迫っていた。

“速い”！

私はそう思った。だが夏目も負けずに刺々しい壁を作る。

だが彼はその壁を切り裂き、夏目の首に刀をつけていた。

「夏目が負けた…？」

彼と夏目は話している。何を話しているかは分からないが夏目がすごく嬉しそうにしているのは分かった。

「っ！そうだ、彼の名前！」

私は生徒会長パワーで彼の名前を調べた。

彼は柊乖離、1-S チーム祈りに所属、

こう書いてあった。

「そっか、」

私は知らず知らず笑っていた。

「もう一人、楽しませてくれる一家の一人が居たんだ。」

「あゝ次が楽しみ！」

私は笑いながら走り出した。

なんで走ったかはよく分からない。

でも興奮して走りたくなった。

彼、彼と戦える！！

それだけで頭がいつぱいだった。

「アハ、柊家はいつもたのしませてくれる。3人目を楽しいかな？」

彼女は走り続けた。この興奮がおさまるまで、

その頃彼は、

「ヴィクシユ！」

くしゃみをしていた。

「?なんか嫌な予感するな？」

その予感が後々当たる事を知らない彼が居た。

第6・5話 生徒会長、（後書き）

どうもつ、生徒会長の心境？ですかね。

次回は乖離君と生徒会長戦います！

お楽しみに！

では今度こそ7話でお会いできることを、、、、

第7話 乱闘の末に残るもの(前書き)

こんにちは今日3つ投稿しました。

ってあれ？もう昨日でした。

これ書いたら寝ます。

おやすみなさい

## 第7話 乱闘の末に残るもの

「決勝戦か…」

今、俺が居るのは待合室、次の試合がある人は此処で待っている。

「なんで俺一人なんだよ…」

何故、俺一人かと言うとなんでも決勝の相手の生徒会長さんのチームが一人だからだそうだ。

「チームじゃねえじゃん。」

一人で愚痴るとむなしくなってくる…

「さあいよいよ決勝戦！決勝は生徒会長とダースホークの一騎打ちだあ！！！！！」

「…………ワアアアアア…………」

「では出てきてもらおう！まず最初に！我等が生徒会長、美人、強い、優しい！

全てが完璧の高梨梨花選手だああ！！！」

おお、なんか観客（主に男子）がすげえ騒いでる。

「続きまして！1・Sクラスのダースホーク、カッコいい、カッコいい、カッコいい！

カッコいいの柊乖離くんだああ！！！」

おかしいだろっ！！！！

「…………キヤー…………」

おかしいだろっ！！！！ 大事なことなので2回言いました。

「君が柊乖離君？」

「そうです、」

話してきたのは生徒会長、

「貴方、夏目の弟君でしょ？」

「…はい」

「やっぱり、でも本当に柊家って美形ばかりだね？」

「先輩も綺麗ですよ？」

「…そう、私は…梨花ね。名前で呼びなさい。」

「はい！梨花先輩。俺のことはなんでもいいんで」

「そう、じゃあ乖離君、やろうか？」

「…はい」

梨花はそう言うのと右手の人差し指を此方へ向けてきた。

「BANG！」

「はい？」

梨花が言うのと俺の目の前に突然爆発が起こった。

俺は素早く闘気を纏い、爆風を受ける。

「っ！」

皮膚が熱い、

「はっ！」

闘気を放ち、周りの炎を消した。

「驚いた？私の魔法、爆発するから気をつけてね？あと系統は火と

土だよ」

爆発って…

「ほらほらもう一丁、BANG！」

目の前に広がる爆発の予兆、

「水刀、纏い」

「水刀、水舞欄」

水を纏った刀で周りを一薙ぎ、爆発が収まった所で梨花に斬りかかる。

梨花はあっけなく斬れた、いや、斬ったのは梨花じゃなかった。

「それ、私の土人形よ？どう、上手でしょ？」

あと、と付け加える梨花、

「それも爆発するから」  
「なっ！」

斬った後から光があふれてくる。そして俺は爆発に巻き込まれた。

「ごほっ！げほっ！っあ、無茶苦茶な！」

俺はなんとか生きていた。

「うわ、これで夏目も倒れたんだけどなあ？」

姉ちゃん、これで倒れてもおかしくないよ？

「ううやってくれますね？」

「でしょ？」

彼女は言いながら指を指す。

俺は必死に避ける。

でも避けるだけじゃ拉致が開かない。

「水刀、水破天虐」

俺は水の高圧刀で距離をとり全て斬り捨てようとした…が

「それはやばい、土人形×16！」

目の前にさっきの人形が16体現れる。それらがすべて一箇所に集まり俺の刀を食い込ませて止めた。

爆発に構えて闘気を全開にして土人形に刀だけではなく手まで貫通させた。

「あ、それ、爆発しないよ？」

「っ！」

気付くとその土人形は鉄のように固く固まっていた。

「くそっ！」

急いで抜こうとするが手まで貫通してるため抜けない、

「じゃあどどめ…かな？」

彼女が手を翳す。

「爆！」

そして俺の周りを激しい光が襲う。

「デイスペル！」

身体に対魔法用魔法を纏う。

本当は飛ばせたり出来るが俺は魔法を放てない。  
そして視界が赤く染まった。

俺はまだかすかに意識があった。  
力を振り絞り立つ。

「え？乖離君、まだ立つの？」

「ハアハアがはっ！」

口の中に血の鉄分が広がる。

「まだ…一撃当ててないです。」

「……」

「ですから俺の一時的本気を使います。」

「え？」

彼女は驚いた顔で此方を見る。

「まだ本気じゃないの？」

「ええ、お見せします…」

「水刀、纏い」

「魔法刀、次の一撃で今ある魔力の3分の2を消費、」

これが俺の奥義、見たいなもの、

自分の魔力の量を好きな量送り、量によってはすさまじい威力となる。

今は大分魔力がなくなっているから3分の2でも大丈夫だろう。

「水刀、水下烈滅！」

「土人形×32！」

32体の土人形、それらを全てなぎ払う。

爆発する頃には次の人形へ移っている。

「残り1体！」

後1体の土人形を斬り、居合いの体勢に入る。

「せあっ！」

掛け声とともに梨花の横を通りすぎる。だが…

最後の最後に狙いがずれて当たらなかったような気がした。

「くそ、結局掠り傷一つ無し…か。」  
俺は眩き、倒れる。そこからはもう真つ暗な世界だった。

結局、最後の彼の一撃は当たらなかったようだ。  
私は考えながら更衣室に入った。

「あの時の一撃、絶対よけられなかったなあ。」  
あの時とは彼が倒れる前の一撃の事だ。

「速くて見えなかった…」  
眩き、着替えるために、上着を脱ぐと左の横腹が痛かった。

「え？」  
確認してみると横腹から血が出ていた。服を見るとさっくり切れていた。

「やっぱ彼の事、好きになるかも。」

私は笑いながら医務室まで向かう。  
多分この傷を見せたら驚かれるだろう。

「皆、どんな顔するんだろうなあ」  
クスツと笑い梨花は走り出していく。  
そして医務室の扉を思い切り開けた。

## 第7話 乱闘の末に残るもの（後書き）

次は登場人物紹介でもやります。

明日もがんばって投稿したいです

では次でお会い出来ることを、、、、

**第8話 生徒会、夜の柊家（前書き）**

こんにちは！

第8話です。

評価が100を超えました！

評価してくださる方どうもです！

## 第8話 生徒会、夜の柊家

クラス対抗戦が終わって1週間が経った。

現在此処はクラス、

「おいつす！乖離、」

「よお、成一、」

コイツの名前は田中成たなかせいいち一

つい最近同じクラスで話していたらいつの間にか友達と呼べる存在になっていた。

いい奴なんだが…

「なあなあ？生徒会長ってかわいくね！？」

あ〜でも！お前のチームの皆も捨てがたいしなあ？

まてよ！くそっ！先生を忘れてたっ！！

俺は誰がいいかなんて選べない！

乖離！お前は誰を選ぶ！」

うん、まあ極度の女好き、顔は短髪で逆立てて整っているんだけどね…

彼女とかはたまに出来るらしいよ？

でも出来た途端にナンパしに行くって…フラレルヨナ…

「聞いているのかよお乖離い〜無視するなよお〜オイ〜」

「あ〜うん、誰でもいいよ〜お前は誰がいいんだ〜」

とりあえず流す。

「っ！？俺は選べない！

こんな可愛い女の子たちの中から選ぶなんて！

無理だあああああああ…！」

「はあ、いい奴なんだけどなあ」

周りの女子が離れていく。

そこで校内放送が入った。

「ピンポンパンポン、迷子のお知らせをします。

なんか髪の毛が黒くて、最近編入してきた、柊乖離君、柊乖離君、至急生徒会室まで来てください。生徒会長さんが恋しいと言っております。

繰り返す、って冗談だよ？ねえ先生やめっ————ツ————

「ガチャリ」

「……ハイ？」

「失礼しました。柊乖離君とそのチームの方は至急生徒会室へ起こしてください。」

梨花先輩……ドンマイです。

俺は心の中で合掌、そして生徒会室へ向かった。

俺は今、生徒会室の扉の前にいる。

裕香とか来ると思ったんだが……もう来てるのか？

「ハア仕方がない、一人で入るか。」

「失礼しま——」

「あっ！お兄ちゃん！お姉ちゃん！お兄ちゃん来たよ！？」

「————した。」

俺は扉を閉めた。

裕香達の姿は見れたが俺の前に2人会いたくない人物が……

「お兄ちゃん、なんで逃げるの？」

「よお……祐樹」

「ねえなんで逃げるの？」

「……」

「もう…逃げないでね？」

「…はい」

俺は生徒会室に連行された。

「遅かったね？乖離君。」

「梨花先輩？なんですかあの放送、」

「ん？アレ？結構本気だったんだけど先生に止められちゃった…テヘツ」

「テヘツ…じゃないでしょおおおおお！」

「会長、それより本題に…」

会長の後ろで立っている女の子がいた。

「あ、うん、あこの子は奈央ちゃんね？」

「どうも、3・S小椋奈央です。」

「どうも…」

後ろの女子はゆっくりと頭を下げてる。おれも釣られてお辞儀をする。

「それで、本題なんだけどね？乖離君。」

「はい」

「実は1年生生徒会メンバーになってほしいの！」

「…え？」

「だから1年生生徒会メンバーになってほしいの！」

「いや、だからなんで俺が？」

「強いから、カッコいいから、あと貴方が他の女の子とイチャコラしないように監禁

…もとい見張らなければいけないので、」

「今サラツと危ない単語聞こえましたが…？」

「ちなみに裕香さんや愛さんや明さんには断りをいれましたので…」

ぶつちやけ貴方に拒否権はありません。」

会長の後ろの奈央さんが… oh俺の人権はいずこへ…?

「と言うことで乖離君の生徒会メンバー就任に拍手！」

ワーパチパチ)

つて違うよお!

「まあいいですけど…。」

「お兄ちゃん？」

「…何だい？祐樹？」

「聞きたい事があるの。」

お姉さんまで加わりました!

「なんで10歳の誕生日の日に家を出て行ったの？」

姉と弟が交互に聞いてくる。

「…家を出たわけじゃない。」

「え？じゃあなんで」

「父親に追い出されただけだ…。」

「っ！」

「え？」

「それ本当なの？」

「…ああ」

「そっか、父様、嘘ついてたんだ、」

「ねえお姉ちゃん？」

弟が笑いながら、

「今日、父様殺すの手伝ってください。」

「うん、祐樹、わたしもそれ言おうと思ったんだあ、殺つちやおう

か」

危ない！この子達は危ない！

「待て待て、お前ら殺すなよ？いいな！殺すな？」

「…分かりました、お兄ちゃんがそんなに言うなら…。」



ギルドなんて行ったことがない…

「そう、じゃあ乖離君？2日間、学校休んでいいから、C以上になつてきて？」

「はい？」

「聞こえなかった？Cランク以上2日以内。」

「えつと休むとは・・・」

「奈央、乖離君2日間休みにしといて、」

「もう完了しています。」

この人達本当の悪魔だ…

こうして俺は一人でギルドへ行く事になった。

その日の夜、

場所は現在柊家、

「父様〜」

弟、祐樹が父に駆け寄る。

「どうした？祐樹？」

父様と呼ばれる人が笑いながら話す。

「聞きたい事があります〜」

「なんだい？」

「乖離兄様を何故追い出したんですか…？」

「っ！…なんの事だい？祐樹、乖離は自分の意思で10歳のとき…」

「言い訳はいいんですよ…聞いているんです、何故って？分かるでし

よう？ねえ父様、」

「だから知らんと…」

「…もういいですよ…。」

「お姉ちゃん、お母さん、地下に行きましょう。」

「貴方？ちよつと私も聞きたい事があるの…ね？だから

拷問部屋…もとい地下室、行きましよう？そこでじつじつと聞き聞きますから…ね？」

「っ！夏目お前から何か言っただけやいなさい！」  
父が叫ぶ。

「いやです。」

「なんだとっ親にその」

「自分に聞きなさいよ？お父さん？なんで連れられるか分かってる  
くせに…」

大人って酷いんですね？まだ10歳の子供をお金も持たせず…ね？」

「いや…アレは。」

「アレは？と言っことは本当にしたんですね？」

「だからそれは」

父が口ごもる。

「ハア、言い訳はいいんだよ…それともなんですか？そんな戯言言  
つたら弟が帰ってくるよ？」

「乖離が帰ってくるよ？さあ吐きましよう寝ないでくださいね？、  
まあ今夜は寝かせませんが」

その後、朝まで断末魔の叫びが聞こえたと言っ、

## 第8話 生徒会、夜の柊家（後書き）

感想・誤字脱字があつた場合は教えて下さい！  
では9話でお会い出来ることを、、、、

## 第9話 ギルド（前書き）

こんにちはっ

第9話です。最近感想をいただきました。

ありがとうございます！

感想、待ってます！

## 第9話 ギルド

朝8時、この頃はいつもなら学園で成一とかと駄弁っているだろう。でも今日は違う…会長のせいでギルドへ行くことになった俺。まあギルドも行ってみたいと思っっていたから嬉しいが…

「ここか？」

目の前には大きい建物、看板に斧と剣が交差してその中にギルドと書いてある。

中に入るととても広かった。それ色々な人がいた。

筋肉隆々のごついおっさん、若い男達、女も結構居る。

あおれに綺麗な人やかわいい人がいるので後で成一を連れてってみるか。

とかなんとか思いながら受付に行く。

「いらっしやいませ、ギルドは初めてですか？」

「はい、まあ一応、ていうかなんで初めてって分かったのですか？」

「ええ、まあ見たことない人でしたので…」

「へえ、じゃあギルド登録お願いします。」

「はい、少々お待ちください」

「ではギルドの説明をさせていただきます。」

「はい」

「本来ギルドはモンスターの討伐や捕獲、などを主としておりますが、

中には護衛や、人物の保護、などもしております。

まあ護衛ですとかは高ランクにならないと受けられません。」

「そしてランクの説明をさせていただきます。」

「お願いします」

そして長々と説明が始まる…

「本来ランクはG〜SSSまであります。最低がG、最高がSSSです。」

まあ過去に一人、Zクラスというクラスがありましたか…」

「なんでZなんですか？」

「それはZ（ぜってえ勝てねえよぉ！）の略です。」

「…そうですか。」

聞かないや良かったかも…シラケタ…

「当然貴方はGクラスからです。」

他には…えっとGクラスでもSSSクラスの依頼は受けられますが、ギルドは責任を取りかねますのでご注意を、」

「分かりました。」

「他に質問とかはありますか？」

「じゃあ、俺魔法使えないんですけど…大丈夫ですよね？」

「はい、えっと魔法が使えない方でも剣術に優れているとか武術に優れているとかそういう特殊能力などがあれば大丈夫ですが…ありますか？」

「はい…一応刀術を覚えてます」

「なら多分大丈夫だと思います。」

「はい、」

「あとこれを、」

「なんですか？コレ、」

「貴方のギルド証です。そこでランクなどが書いてあります。」  
見ると俺の名前、ランク、歳が書いてあった。

「ではいつてらっしゃいませ」

受付の人が深々とお辞儀をする。なんとか登録出来た俺であった。

そして俺は早速依頼板を見てみることにした。

「これが依頼板か、」

依頼板には10個のボードが並んでいた。

一番左のボードにGと大きく書かれた板があったので向かった。

「むう、あんまり楽しそうじゃない。」

そこに書いてあった依頼は、(ペットを捕まえて、)とか(話し相手になつて、)とか

「ギルドの依頼じゃないでしょお」

俺は嘆息した。

そこで俺は目標であるCランクの依頼を見ることにした。

「お、いいなあコレ」

俺が目につけたのは黒熊王キングケリスリーの討伐、または無力化だ。

俺がそれに手を伸ばして取る瞬間、手を捕まれた。

俺は手を掴んできた方を見る。

そこには俺より少し年下くらいの女の子がいた。

「その依頼はやめた方がいいと思うよ？」

可愛らしく笑い…と言うか元々可愛い、忠告をしてくれた。

「ありがとね？君何歳？ダメだぞ？こんな所に来ちゃ？早くお家に帰りなさい。」

「…私14歳なんだけど、一応貴方よりランク高いと思うんだけど！」

「えっ！？14歳？ああ、なんだ14-4=10だよな？ごめん」  
めん」

俺が言うと女の子の空気が変わる。

「いい加減にして欲しいかな？ていうかお兄さんいくつ？もしかしてロリコン？」

「ロリコンは酷いなあ？これでも15歳だよ？」

「っ！？15歳…ありえない。17、8かと思った。」

「うん、まあ言われ：た事ないよ？」

「もういいよっ！それはやめた方がいいよ！」

「うん君、ランクいくつ？」

「私？ランクは確かAだったと思うよ？」

「：はい？」

「Aだつて！ホラ！」

女の子はギルド証を見せてくる。

そこには三月柚子みつきゆず、14歳、ランクAと書かれていた。

「っ！」

俺は驚く。

「ほらね？Aでしょ？」

「嘘だ、本当に……」

「本当よ！見かけで判断しないで！」

「だつて本当に……14歳だつたなんてっ！」

「そこ！？」

俺はずっと気になっていたギルド証の歳の部分が14歳であることに驚愕した。

「そこじゃないでしょ！？ほらっAランク！」

「あつ、本当だ、すごいすごい」

「馬鹿にしているのかな？私、2系統使えるんだけど？」

「へえ何と何？」

「水と風」

「すごいねえ？」

俺は女の子の頭を撫でてやる。

「……やめろ」

顔を赤くしながらぶつかってきた。

「あつ！」

女の子は躓き転びそうになる。

「つと、大丈夫？」

俺は即座に反応して女の子を支える。

「…ありがとう。でも貴方がもし本当にその依頼に行くのなら私もいく！」

「まあいいけど…なんでこの依頼が危険なんだ？」

「それは…嫌な予感がするの。まあ信じてくれないでしょうけど」

「いいよ、一緒に行ってくれるのなら嬉しい。」

「本当に!？」

「ああ、俺はかまわないけど」

「そう、でも私可愛いから襲われちゃうかもしれないし…」

「ああ、大丈夫、俺お前みたいな子供を襲うような変態じゃないから。」

「なんか傷つくよ…」

「まあ気にするな。」

俺が慰めてやる。俺いい奴だわあ

「ところでアンタ何系統使えるの？」

「俺？俺は魔法使えないよ？」

「え？嘘、」

「嘘じゃないよ？でも少し刀術習っているから」

「…そう、見込み違いだったかなあ？」

女の子はなにやら呟いていたが…

「じゃあ行こうね？」

「ああ、」

「なんて呼べばいい？」

女の子が聞いてくる。

「何でもいいよ？」

「そ、じゃあ行こう、お兄ちゃん！」

「っ！やめてくれないか、その呼ばれ方はきつい」

主に弟の祐樹のせいだ…

「やだ お兄ちゃん！」

「くそ、お前はなんて呼べばいい？」

「私は三月柚子、さっきギルド証見たでしょ？」

「そっか、じゃあよろしく、柚子？」  
「うん、よろしくね？お兄ちゃん！」  
キャラ違え」

俺と柚子は2人で依頼して玄関で止まっている。

受付の人が柚子を見た途端すごく丁寧になったが…

そして今俺と柚子は玄関で止まっている。いや止められている。

原因は柚子、何故かと言うと、

「「「我々、柚子ちゃん親衛隊！」」」

こんな奴らが居た。

「柚子？誰だ？」

「うん、なんか勝手に出来た私を守る、みたいなグループ、正直ウザいんだよね。どうにかしてよお兄ちゃん」

「「「柚子様にお兄ちゃん！羨ましい！」」」

「俺にどうしろと…」

「適当にやっちゃってよ、」

「無茶を言っな。」

「さつきから貴様、柚子様になにを！」

柚子ちゃん親衛隊に一人が剣を抜いて向かってきた。

「遅いよ、」

俺は軽く流し、男の背中に蹴りを入れた。

「がはっ！」

男は壁に突撃して動かなくなる。

「「「!!!会員ナンバー145が…」」」

「どっだけいんだよっ！」

「「くそ！喰らえ！」」

息ぴったり、魔法も同時、

「闘気、」

俺は闘気を纏って男達の前に走る、

と言っても男たちには俺がいきなり目の前に現れた、と思うだろうが…

「街中で、魔法を使っちゃあいけないよ。」

俺は2人の腹に1発ずつ殴る。

闘気を使ったからしばらくは動けないだろう。

「終わったよ？ 柚子、」

俺は同行者の方を見る…と口を開き固まっていた。

「お兄ちゃん、何者？」

「しがない高校生…だけど？」

俺は笑いながら言いつつ歩き出した。

## 第9話 ギルド（後書き）

ギルド入りしました。

妹系、って僕の小説に入ってたことに気が付き、

入れちゃいましたノテヘッ

では第10話でお会い出来ることを、、、、

第10話 モンスター（前書き）

10話目突破しました！

やっと…10話！嬉しいです！

## 第10話 モンスター

そして現在、キングケリスリー黒熊王が生息している森へ来ていた。

来る途中何度も柚子に、アンタ、何者？と聞かれていた。いや、

「アンタ、何者？」

現在進行形で聞かれている。

「だから言つたる？しがない高校生」

「それはいい、もう聞いたよ？お兄ちゃん、」

「ぐっ！」

俺は返す言葉が無くなる。

「グオオオオオオ！！！！」

そこに聞こえてきた声、

その声はまさしく黒熊王にふさわしかった。

「お兄ちゃん！行こう！」

「ああ、」

俺達は声のあつた方向へ走り出した。

声の聞こえていた所に来ると周りの木がなぎ倒されていた。

「なんだ？此処は、」

「黒熊王がやったのよ。今回は大きい、」

「グオオオオオオ！！！！」

声とともに現れた体はとても大きかった。

体長5メートルはあるだろう。片目には縦に線が入っている。

恐ろしく獐猛な姿だった。

「お兄ちゃん！コレは私が倒すから見えて！」

「お前！一人で大丈夫なのか？柚子！」

「大丈夫！伊達にAランクじゃないよ！」

言うと柚子は黒熊王に向かって走っていった。

「可愛い熊ちゃん、私の後ろに弱いお兄さんがいるけど、気にしないでね？」

柚子は言った。オイ！弱いつて何だよ。

「水の力にひれ伏せ！渦潮！」

名前の通りに渦を巻いた水が熊に直撃した。

「グオア！」

熊はそれを諸共せず、柚子に爪を振りかぶる。

「っ！やっぱ効かないかな？」

柚子は軽く爪を避けて眩く。

「風水、風と水混ざりて全てを破壊する嵐となれ！烈風水！」

柚子の放った風と水が1本の回転する槍となって熊を貫く。

「グオウア、」

熊は胸を貫かれて倒れた。

「どう？見た？私の実力、」

「ああ、すごい、俺なんて足元にも及ばないよ。」

俺はとりあえず褒める。

「えへへ、」

柚子は笑っている。俺達は依頼が終わり、熊の素材を取り、帰ろうとした。

が、

「グルアアアアア」

またなにやらすぐ後ろから声が聞こえる。

俺と柚子はそろって振り返った。

そこには手と足が短く、大きい顎、1枚1枚が鉄のように黒光る鱗、長い尻尾、

それはワニのような姿をしていた。

「っ！」

柚子が驚いた様子でワニを見る。

「どうしたんだ？」

「アレ、Sランクのモンスター、巨鱈ゲイターだよ。こんな所に居るはず無いのに！なんでっ」

oh…話から察するにやばい奴決定、

「くそっ！烈風水！」

柚子が熊に使った魔法を使う。

だが魔法はゲイターの鱗に当たり四散した。

「なっ！？ありえない。」

柚子は自分の魔法を弾かれて呆然としていた。

ゲイターは長い尻尾を柚子に向けて放った。

「危ない！」

俺は鬨気を纏って、ゲイターの尻尾を受け止める。

「ギッ！」

とてつもない衝撃が手から全体に伝わる。

「お兄ちゃん！何してるの！」

私の魔法効かないのにお兄ちゃんの魔法が効くわけがないよ！」

柚子が泣きそうになりながら怒鳴る。

「言ったる？俺は魔法使えないんだよ。」

「だったら尚更！」

「いいから見てろ、俺の戦い方をなっ！」

俺はゲイターの尻尾を放し、刀を抜いた。

「土刀、纏い」

「土刀、地壕降下」

刀をゲイターの背中に思い切り刺す。そしてそこから土の力で背中

を切り裂く、

はずだった。

「嘘だろ？」

俺の鉄を砕く魔法がまったく通っていなかった。

そこにゲイターの大きな口が迫る。

「土刀、堅閃」

俺はすぐに体勢を取り直し、ゲイターの口に刀を見舞った。

「グルッ？」

ゲイターの歯に当たり止った。ゲイターの歯は1本折れただけ、

「マジ？」

呟きながら後ろに下がり、

「うん、属性がいけないんだよ！そうに決まっている！」

自分で納得して、

「雷刀、纏い」

「雷刀、激雷」

今度は頭に雷を纏った刀で叩き付ける。

バチツと効果音がして頭からちよつと血が出た。

だが致命傷には程遠い掠り傷みたいなものだ。

そこにゲイターの尻尾が横腹を直撃する。

「ぐっ！」

俺は尻尾と同じ方向に流れて衝撃を殺したが服がびりびりに破けていた。

「制服のほうが防御力あんじゃねえの？」

そんな疑問を思う。

そろそろ決めなければまずい、

「雷刀、葬雷撃一手」

脚を強く踏み込みゲイターの後ろに廻って尻尾に一撃を叩き込んだ。

「グルアアア」

今の一撃で尻尾の半分が切れる。

そのまま頭の方に回りこみ、一薙ぎ、二薙ぎ、

ゲイターの顔に二つの線が出来ている。

「とどめだ！」

刀を垂直にゲイターの頭へと突き立てる。

当たった瞬間、火花が散り刀を拒んだがすぐに刀は頭にめり込みはじめて

最後には地面まで突き刺さった。

「グルウウウウ……」

ゲイターの声も弱々しくなっていき、途絶えた。

「勝った…」

俺は刀を放し、大きく呼吸した。

刀を放すと纏っていた雷の光がフツと消えた。

「お兄ちゃん？倒したの…？」

後ろからおずおずと柚子が出てくる。

「ああ、なんとか…な、いって！」

ゲイターに当てられた尻尾の部分が青く変色していた。

「お兄ちゃん！水の加護を、回復」

柚子は右手を俺の横腹に当てて何かを唱えた。と思うと傷がみるみる回復していった。

「ありがとな？」

「いいよ、別に」

「なんだ？泣きそうになつて？」

柚子は目に涙を溜めていた。

「だってえ、お兄ちゃんが、ひっく、うっ居なくなるかと思って、  
つく

怖かったよ～～～～」

柚子はそう言つと俺に飛び込んできた。

俺は笑いながら息を吐いて、

「やっぱり子供…か。」

「子供じゃないし？ていうかお兄ちゃん何者？」

…アレ？

「柚子？口調が…」

「もう泣いてないし、」

「…さいですか。」

「で、お兄ちゃん何系統使えるの？」

「…8系統、」

「はち？」

「うん」

「ありえない」

「うん、言われ慣れてる。」

「でもお兄ちゃんならありえそう。」

「そっか…」

俺は少し笑う。

「でさ、お兄ちゃん、このゲイターどうすんの？」

「刀抜けないんだよね？」

深く刺さった刀は地面からは抜けたが肝心のゲイターから抜けない。

「どうするの？お兄ちゃん？」

「う〜ん仕方が無い、このまま持って帰るか。」

俺は鬨気を纏って半分引きずるように刀ごとゲイターを担いだ。

「…お兄ちゃんってさ、何でもアリなんだね。」

「そうかな？」

「うん、でもそんなお兄ちゃん、好きだよ！」

柚子は笑いながら俺の前を走り出した。

俺も後を追って走り出した。

## 第10話 モンスター（後書き）

ギルドが終わったら何をすれば…？

考えないといけません！

では第11話でお会い出来ることを、

第11話 死闘の末の後始末（前書き）

こんにちは！

今日やっと活動報告の仕方を覚えました！

時間がある方はつまらないと思いますがみてください！

## 第11話 死闘の末の後始末

かれこれ巨鰐ゲイターを引きずって何時間経っただろう。

「やっと着いたか。結構疲れたな。」

俺は息を吐きながら足を止める。

「しょうがないよ、お兄ちゃん、でももう門の前だよ?」

「ああ、じゃあ行くか。」

俺達はルソス王国の門に入る。

「その二人!止まれ、」

話しかけて来たのは門番、

「なんですか?」

「そのモンスターはどうしたんだ?」

「コレですか?殺して刀が抜けないので…引きずって来たんですけど、なにか?」

「…お前、名前は?」

「柊乖離15歳です。一心王立魔法学園の1-Sクラスです。」

「…柊?まあいい。ギルド証を提示しろ。」

「どうぞ」

俺達二人は揃ってギルド証を見せて、

「よし、通れ。」

通してくれた。

「ありがとうございます。」

「ちょっと待て、そのモンスターの名前は?」

「えっと、巨鰐ゲイターです。」

「そうか、ゲイター、って…え?」

「では失礼、」

俺達は全速力で走って逃げた。

急いでギルドの前まで来た。

「ハアハア、お兄ちゃん、魔法学園の生徒だったの?」

「そつだよ？」

「…私、来年そこに入るんだけど？」

「そつ、で？」

「私その学園の中等部の3-Sクラスなんだけど？」

「そつ、で？」

「…たまには遊びに来てつて事、」

「?いいのかな?行つても、」

「いいと思うよ?まあお兄ちゃんがロリコンつて思われるだけだし、

」

「やだな!それ、」

「嘘嘘ホント、ダイジョブだよ?」

「どつち!?まあ暇なら行くよ。」

「うん!じゃあギルド行こう!」

俺達はギルドの扉を勢いよく開けた。

「あのく、乖離さん?その担いでいるものは…?」

「えつと黒熊王を倒した後に、襲われちゃつて?」

「違います!その魔物の名前です!分かるでしょ?」

「え?受付さん知らないんですか!?」

「知つてますよ!巨鱔Sランククラスの化け物、<sup>ガイター</sup>

その皮膚は並の武器や魔法をまつたく通さない、そうですよね?」

「いや、俺名前しか知りませんでしたし…」

「…ハア、もういいです。で、なんで担いでるんですか?皆怖がつてます。」

見ると俺達の周りには人がまつたく居なかつた…

「えつと、なんでつて刀を頭に刺したら抜けなくなつちやつて…」

「はい…?その刀で刺した?」

「はい、グサツと」

「その刀は伝説級の名刀ですか…?」

「いえ、師匠から貰つた練習用刀です、」

「どうやって練習用で刺したんですか、」  
「こっ、グサツと…?」  
「ちよつと待つててください、マスター呼んできます。」  
受付の人は言い放ち奥に引っ込んでいってしまった。  
「俺なんか悪いことしたかな?」  
「お兄ちゃん…全てに置いて鈍感なんだね…?」  
「なんですとつ!」  
俺ってチヨ一敏感だぜ?

しばらく経ち、2人の人影が奥から出てきた。

「この子?Sランク級倒したつての?」

「はい、マスター」

そこに居たのはさっきの受付さんとおばあさん、

「坊や?名前は」

「柊乖離です。」

「坊や、柊家の元長男かな?」

「…何故それを知ってるんですか?」

「年寄りを舐めるんじゃないよ?」

「何故に年寄り?」

「気にするな、で倒したのかい?ゲイターを」

「はい、襲われたんで」

「その刀で倒したのかい?」

おばあさんは刺さっている刀を見る。

「はい、これで、」

「嘘はついてないけどまだ隠してる顔…さね?」

「…エスパーですか?」

「年寄りを舐めるんじゃないよ。」

「確かに隠してます。」

「そうか、私はこのギルドのマスターさね、名前は…マスターさね。  
よろしく頼むよ。」

「名前がマスターですか？」

俺は疑問に思い聞いてみる。

「名前は違う。でもマスターとでも呼んでくれ。」

マスターは答える。

「その刀を刺した時に使った技を使えば抜けるんじゃないかい？」

マスターが笑いながら言う。

「それはその技を此処で見せる…と？」

俺は自分が思ったことを問う。

「そうさね？倒したなら見せてくれよ。倒した技を、」

「・・・はい」

俺は諦め、袖子に下がっているように言う。

「見ててください。」

「いいよ、」

「雷刀、纏い、」

「雷刀、激雷」

俺は歯を折った時の技をゲイターから抜くように放つ。

だがゲイターと刀はびくともせずただ俺が引っ張っているだけだっ

た。

だが周りの袖子以外は息を呑んでいた。

勿論、マスターも

「やっぱ倒した技じゃないと抜けないのかな？」

俺は周りを気にせず続けた。

「雷刀、葬雷撃一手」

倒した時の技を使う。

さつきよりも強い雷が纏われて、刀が抜けた。

「あ、抜けた。良かったあ」

「良かったですね？お兄ちゃん！」

俺達2人は笑いあう。

「お主、なんだその力と膨大な魔法は…」

「これは魔法じゃありません、俺は魔法が使えない。」

「じゃあ何をした。」

「纏ったんですよ。雷を」

俺は間髪入れずに返答した。

「まあよい、じゃあ坊やは本当に倒したんだね？」

「はい」

「なら坊や、坊やはGランクからAランクに変更、さね？」

「ちょうどCランク以上にならなきゃいけないかったんで……」

「そうかい。じゃあ報酬だ。着いてきなさい」

俺と柚子はマスターの後についていった。

「報酬はSランク討伐料、依頼料、巨鱔ゲイターの素材、  
占めて1000万Tテラさね？」

「そんなに!？」

「いいんですか?!？」

俺達は交互に言う。

「別にいいさね、どうせ坊やにはお世話になるんだ。」

マスターは言うのと2人に500万Tずつその場で出してきた。

「よくこんなに早く……」

「これは私の金さね。別に後で取り立てればいいさね。」

「マスター恐るべし!」

「五月蠅いよ、さっさと行くさね?あと坊やには明日も来てもらう

さね。」

「…はい」

「お兄ちゃんが来るなら私もいく」

俺達はマスターの部屋を出た。

そして戻ると、一人の女が俺の前に出てきた。後ろには一人の男、

「貴方、Aランクになったんでしょ？」

「まあ成り行きで……?」

「そう、じゃあ私の奴隷になりなさい!」

「…はい？あの〜奴隷の使用は禁止されているはずですが？」

「じゃあ部下、」

「嫌です。」

「そうか…じゃあ私と決闘しろ、お前が負けたらお前は私の奴隷…  
もとい部下だ！」

「あの〜勝手に話を進めないで貰えます？」

「よし準備しろ！今すぐだ。」

女は言つて、俺を手招きしてきた。

「なんなんだよ、もう」

周りからざわめきが聞こえる。

「おい！姫騎士と彩刀が決闘だとよ！」

「おう！お前どっちに賭ける？」

「あの〜彩刀って誰の事ですか？」

「ヒッ！許してくれ！その二つ名はお前さんのだよ！」

「…はい？」

この時俺の二つ名が決定していた。

## 第11話 死闘の末の後始末（後書き）

主人公に二つ名がつけました。

さらに後に出て来た女と男の二人組、

お楽しみに！

感想などもお待ちしております。

では12話でお会い出来ることを、、

## 第12話 決闘？（前書き）

こんにちは、

11話の訂正をしました。

Sランク報酬が1000Tではなく1000万Tでした。  
指摘してくださった方ありがとうございました。

## 第12話 決闘？

いきなり決闘？を申し込まれて連れ出されてきた場所は真つ暗な森、  
「何処ですか？ここ？」

俺は前にいる女の人に話しかける。

「あまり人が来なくて有名な森だよ。

安心していい。魔物は居ない。」

「そうですか。」

袖子はもう遅いからと置いてきた。

二人の間に沈黙が訪れる。もう一人の男は何も話さず、ただ歩くだけ  
辺りの木が風で揺れて葉の擦れ合う音が静かに聞こえる。

風が止むと俺達の歩く音が聞こえなくなった。

とても静かな時間、ただ足を動かすだけの静かで退屈な時間、

「さて、ここらへんでいいでしょ？」

その静寂な時間をいつの間にか足を止めた彼女が壊す。

「俺は何処でも、決闘と言われ着いて来たただだからな。」

「それもそうね」

彼女は少し考えて、よしっ！と気合を入れると説明を始めた。

「貴方を此処に呼んだ理由、それは戦ってみたい、と言うのもある

けど、

もう1度あの技を見たいという方が強いわ。」

彼女は笑いながら話す。

「私はアリア、歳は：18歳、貴方と同じかしら？」

「俺は柊乖離、15歳だ。お前より3つ若い。」

「嘘……」

彼女は俯いてしまった……

「残念だったな？で決闘はするのか？姫騎士さん、」

彼女の二つ名を呼ぶ。彼女は苦笑いをしながら此方を見る。

「姫とか付いてるけど姫じゃないわよ？」

「知ってる。お前みたいな礼儀の無い奴が姫なわけないだろ？」

「姫騎士とか言うならアリアと呼びなさい。」

「そう、で？アリア決闘は？」

「するわよ、じゃあそろそろ始めるか。」

彼女は男に合図をする。

男は小さく頷くと、

「試合、開始」

とても低い声で言った。

「はあ！」

同時にアリアは背中 of 剣を抜いて一瞬で間合いを詰めてきた。

俺はそれを闘気で受け流し刀を抜いて応戦する。

ただ刀のぶつかり合い、魔法などを一切使わない斬り合い、

だが少しずつ俺の方が有利になって来た。

隙を突いて斬り込んだがそこにアリアは居なかった。

「やっぱり、普通の斬り合いじゃ負けるよね。」

彼女は微笑んで言う。

「当たり前、俺は魔法が使えないからな？」

「そうか、じゃあ魔法を使おうかな？」

「炎魔陣、裁き」

「四元素魔法拒絶」  
ディスプレイ

俺の足元を炎の陣が柱となり全てを焼いた。

「全然、効かないよ？アリア」

「なによ…その化け物技」

「俺の得意技だ！」

驚愕しているアリアを見ながら笑い、親指をグツと立てた。

「…なら化け物には化け物技を」

「隕石衝突」  
メテオ

俺は身構える、でも彼女は右手を空に挙げただけで何も起こらない。

「何も起こらないぞ？失敗か？」

俺は嘲笑しながら彼女を見る。

だが彼女は笑っている。

「待ちなさいよ、コレ制御難しいのよ？」

彼女はまだ空に手を出したまま、

このまま何も起こらないと思った時、とてつもない衝撃破が俺を襲った。

「っ!？」

俺は衝撃波のした方向、つまり上を見る。

「なんだよ！あれ」

俺が見たものは直径2m程の大きな隕石だった。

「成功、かな？」

アリアは疲れた表情で此方を見る。

俺は何故アリアが右手を空に挙げているかようやく分かった。

アリアは制御していた。

魔力を使って隕石を引き寄せ、俺に当たるように、

「さあ乖離！コレはあの刀の技じゃなきゃ無理でしょ？」

指摘してくる。それはそうだ、第一、あれが本当の隕石で、動かすだけに魔法を使っていたら、アレは魔法じゃない、つまりディスプレイは使えない。

残る方法はただ一つ、刀に纏って消滅、または粉々にする。

「面倒くさい。」

流石に隕石を一発で消滅させる程の魔法があればいいが使えない。

なら、と考える。

「俺にしか出来ない技を使うしかないか。」

俺は刀の前に出して構える。

「闇刀、纏い」

「闇刀、闇狩り」

刀に黒い物が浮き出す。

それを隕石の真ん中に刺した。

隕石は斬れる、と言うより消える。  
俺は半分にして、また半分にする。  
後はがむしゃらに斬りまくる。

「ハッ！」

息が切れてくる。

隕石はどんどん小さくなり、最後には消滅して消えた。

「フウ〜」

長く息を吐き出す。

心臓はまだバクバクと鳴っており、

息もハア、ハアと切れている。

「闇は疲れる」

そう、比較的闇は他の魔法よりも疲れる。

消滅させる程の威力だからかもしれないが…

「おい、アリア危ないだろ？」

「……隕石、消えた？」

アリアはまだ頭がちやごちゃしているようだ。

俺はアリアに刀を向けて言った

「俺の勝ち？だな」

「…そうね、あれ返されちゃ何もいえない」

「試合、終了…」

遅れて男の声が響く。

「帰るか…？」

「そうね、帰りましょう」

俺達は元来た道を帰ってギルドに着いた。

俺もアリアと男に別れを告げて帰った。

ちなみに元居た家は俺の寮の部屋が出来たのでお役御免になっている。

明日もマスターに呼ばれているからギルドへ行かなくてはいけない。  
俺は現実逃避しながら布団に入り、そのすぐ後には意識は無かった。

## 第12話 決闘？（後書き）

今回は少し短かったかと思います。  
展開が分からなくなってきました。  
では13話でお会い出来ることを、  
、

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9007x/>

---

various swoud

2011年10月31日23時30分発行